立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
企画研究プロジェクトＩ（教員・学生参加型）２０２４年度研究成果報告書

プロジェクト学生代表者	学科・学年	氏　名
	コミュニティ政策学科・4年	米山　大雅
指導教員	所属･職名	氏　名
	コミュニティ福祉学部・准教授	阪口　毅
研究課題	公営団地自治会と学生との連携による実践･教育･研究プロジェクト: 学生団体「立川プロジェクト」とのインターカレッジ型ネットワークの構築	
研究年度	２０２４年度	
プロジェクト分担者	米山　大雅、上山　真央、青木　理倫、瀧野　ここみ、朝香　七海、栗原　大樹 星井　彩	

プロジェクトの内容及び成果の概要

本プロジェクトは立川市に位置する都営団地（通称「大山団地」）をフィールドとし、団地自治会と連携を図りながら、地域行事への参加や住民との交流を通じた実践的な活動と、地域コミュニティの現状と課題を探る調査研究を行ったものである。また、こうした社会的意義や独創性のある取り組みを一過性のものにせず、今後も継続的に発展させていくことを目指し、インターカレッジ型のネットワーク構築を目的としている。今回頂いた資金は行事参加の上での宿泊費や文献購入費などとして活用させていただいた。

実践活動としては、「大山夏まつり」（8月）や11月「大山防災フェスタ」（11月）に参加した。夏まつりは、コロナ禍により中止が続いていた中で4年ぶりの開催となり、大学生はテント設営や机・椅子の運搬といった運営の基礎を支える作業に加え、体育館内での子ども向け企画として、ブース形式で出展を行った。立教大学は「妖怪倒し」というボウリング形式の遊びを出展した。団地住民のみならず近隣小学校の児童らも多数来場し、会場は大いに盛り上がった。また、防災フェスタでは、大山小学校の各所に設けられたブースを住民がラリー形式で巡る仕組みの中で、立教大学は体を動かす形式の「モグラたたき」ゲームを出展し、子どもから高齢者まで幅広い世代に楽しんでもらった。こうした行事への参加に加え、事前の準備や自治会との会議等を通じて、関係性の構築に努めた。

調査研究の面では、大山団地に関する文献や、前自治会長が執筆した書籍を購入し講読を行ったほか、各分担者がフィールドノーツを記録し、それを共有しながら観察の意味づけを行った。また、本プロジェクトでの活動をもとに、分担者が大学生を交流人口と位置づけた研究、コロナ禍以降の地域コミュニティの持続可能性に関する研究として、それぞれ卒業論文に展開する予定である。

さらに、次年度以降の活動継続に向けては、中央大学「立川プロジェクト」と連携を深め、今年度収集したデータや記録の引継ぎが可能な体制づくりに取り組んだ。中央大学では2012年より、学生の有志団体として活動を行っており、本プロジェクトと協力して団地での活動を継続してきた。具体的には、今年度に得られた各種データやフィールドノーツ、住民や自治会とのやり取りに関する情報を整理・蓄積し、それらが次年度の新たな参加学生にもスムーズに共有されるような仕組みを構築した。また、プロジェクト間の定期的な情報交換の場を設け、課題や知見を共有する中で、団地における活動の位置づけや意義を再確認していった。

本プロジェクトでは、地域社会との関わりの中での実践と学術的な探究、そして大学間の連携を通じて、地域と各大学の新たな関係性を模索し、今後の継続的な活動への足がかりを築いた。来年度に向けては、今年度の活動を土台とし、実践と研究を往還しながら、地域との関係を維持していき、持続的かつ発展的なプロジェクトとしての定着を図りたい。